



Data	2023-44
監督	河毛俊作
脚本	大森寿美男
エグゼクティブ・プロデューサー	宮川朋之
原作	池波正太郎「仕掛人・藤枝梅安」
出演	豊川悦司／片岡愛之助／菅野美穂／小野了／高畑淳子／小林薫／椎名桔平／佐藤浩市／一ノ瀬颯／田中奏生／石橋蓮司／高橋ひとみ／篠原ゆき子／小林綾子

👁️👁️ みどころ

近時の邦画は、“キラキラ青春モノ”や“お笑い色満載”のものが多く、その影響は時代劇にまで！さらには、NHK大河ドラマにまで！

そんな中、「池波正太郎生誕100年企画」として登場した“時代劇、新時代。”は“正統派時代劇”として評価できる。豊川悦司の藤枝梅安役はベストチョイスだし、菅野美穂もいい味を。そして、本作では、椎名吉平が1人2役でストーリーを牽引する上、ゲスト出演の佐藤浩市が梅安との“日く因縁”役を、さすがの熱演！

これまで“攻めの仕掛”一辺倒だった梅安が、本作ラストではじめて見せる“防御の仕掛”をじっくりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■舞台は京都から。こんな設定、あんな設定の展開は？■□■

日本史では京都が舞台になることが多い。とりわけ、幕末の京都における新選組の活躍は有名だ。しかし、薩長を中心とする尊王攘夷派の浪人を取り締まるため、京都の警備隊として設置された新選組の評価は大きく分かれている。新たに京都守護職に就任した会津藩主松平容保の下に設置された新選組の規律は、副長土方歳三が定めた「局中法度」に基づく厳しいものだった。しかし、本作冒頭に見る京都における井坂惣市（椎名桔平）率いる無頼の浪人集団の行動はハチャメチャ。いきなり押し入った町家で金や女を強奪し、逆らう者は容赦なく切り捨てた上、血塗られた自らの手形を交付して「借りたのじゃ！」と強弁する姿は、まさに最悪！こんな時にこそ、新選組が必要なのだが・・・。

他方、今は新幹線のぞみで東京・京都間は約2時間だが、梅安（豊川悦司）の時代はすべて徒歩だから大変。今、梅安が相棒の彦次郎（片岡愛之助）と共に江戸から京都に向かっていたのは、幼い頃自分を拾って鍼医にしてくれた恩人・津山悦堂（小林薫）の墓参り

をするためだ。そんな時、彦次郎はある男の顔を見て、「あの野郎、生かしてはおけねえ」と呟いたから、これは何か曰く因縁がありそうだ。もっとも、彦次郎がそんな風に言う男はきちんとした身なりの武士で、非道を働くような人柄には見えなかったから、梅安は彦次郎の言葉に違和感を覚えたようだ。なお、井坂惣市が徒党を組んで京の街を歩く時に、たまたますれ違った2人の侍が井上半十郎（佐藤浩市）と佐々木八蔵（一ノ瀬颯）。文句を言おうとした佐々木を「つまらんことに関わるな」と諷めた井上だったが、冒頭にこんな設定、あんな設定が表示されると、さあ、その後の展開は・・・？

■□■ 恩師の墓前で明確なストーリーの提示が！ ■□■

レオナルド・ディカプリオが一人二役を演じた『仮面の男』（98年）では双子の判別が難しかったが、本作では、双子であるとわかる井坂惣市と峯山又十郎は同じ椎名桔平が演じていても、あまりにも対照的な衣装、立ち居振る舞い、性格だから、「これが双子？」と思ってしまう。峯山に双子の弟がいることがわかったのは、梅安の恩師・悦堂の墓前で対面した梅安に対し、「双子の弟がいる」と峯山の口から語られたためだが、それを聞いた梅安が働かせた推理は誰でもわかるもの。したがって、彦次郎が梅安の説明を聞いて納得したのも当然だ。それだけなら何の面白みもないし、「仕掛人シリーズ」のストーリーにもならないが、梅安が上方の顔役で殺しの依頼を仲介する元締“蔓”でもある白子屋菊右衛門（石橋蓮司）の元に挨拶に行ったところから、あっと驚く展開になっていくので、それに注目！それは、梅安が菊右衛門から井坂の仕掛を頼まれたことだが、その仕掛の起り（依頼人）は一体誰？また、仕掛料が20両とメチャ安いのは一体なぜ？

さらに、本作のストーリー構成で面白いのは、梅安に井坂の仕掛けを依頼する前に、菊右衛門は井上と佐々木の2人に井坂の仕掛を依頼していたことだ。正規料金を大幅に下回る仕掛料に納得できなかった井上と佐々木は、菊右衛門からの依頼を断ったのだから、菊右衛門がそれを別の仕掛人に依頼するのは自由で、掟に沿ったものだ。

他方、店ですれ違いざま、梅安の顔を見て目を見張った井上が、急いで菊右衛門の元に戻り、自分が断った後に引き受けた仕掛人は誰だ？と聞くのは、明らかに掟破りだ。それは分かっているはずなのに、なぜそんな掟破りをしてまで井上は井坂殺しの仕掛を引き受けた仕掛人の名前を聞き出そうとしたの？なるほど、これで全てのストーリー展開の提示が見えてくることに・・・。

■□■ 梅安も彦次郎もひどい体験をしたが、井上だって！ ■□■

あちらこちらの女に子供を作らせることができる男（父親）に対し、母親は自分の腹を痛めて子供を産むのだから、母親の子供に対する愛は無限度で絶対的なもの！そんな“キレイ事”は第1作で聞かされた梅安の身の上話を聞けば吹っ飛ばはずだ。さらに、本作で梅安が峯山と共に恩師・悦堂の偉大さを語り合うシーンを見れば、「産みの親より育ての親」という言葉の重みがよくわかってくる。

今の時代は、子供に対するいじめに敏感だが、私の小さい頃はガキ大将による女の子い

はじめどこにでもあったし、グループ毎の喧嘩がどこにでもあったことは『ウエスト・サイド物語』（61年）等を見れば明らかだ。しかし、本作ではじめて彦次郎の口から梅安に語られる、井坂らによる彼の青春時代のひどい体験は、あまりにひどい。したがって、最愛の妻と子を死に追いやった、憎き相手の顔を間違えるはずはない、という彦次郎の言葉の重みもよくわかる。しかし、彦次郎が「あの野郎、生かしてはおけねえ」と呟いた男、峯山が、本当の敵である井坂の双子の兄だったとは！

本作序盤の展開を見ていると、彦次郎による峯山（本当は井坂）への復讐物語がメインになりそうだったが、上方の顔役で殺しの依頼を仲介する元締“蔓”である菊右衛門とも深いつながりのある梅安が、依頼主不明のまま井坂の仕掛を引き受けたところから、『梅安2』本来の物語が進んでいくことになる。それはそれで納得だが、本作ではもう一つ、ゲストとして出演している佐藤浩市演じる井上との絡みがもう一つのメインストーリーになっていくので、それに注目！梅安も彦次郎もたしかにひどい体験をした結果として仕掛人になったことはよくわかるが、不幸の自慢比べ（？）は梅安と彦次郎だけでなく、井上だって！私は篠原ゆき子は現代型美人だと思っていたが、本作ではその篠原が井上の妻おるい役として登場し、思いがけない不幸な最期をとげるので、それに注目！梅安は第1作でも万七の女中おもん（菅野美德）に手を出して深い仲になりつつ店の情報を仕入れていたから、あまり女癖は良くないはず。そんな梅安は本作で、井上の妻であるおるいに対して一体何をしたの？さらにその結果生まれた、梅安と井上との憎悪の鎖とは？

■□■井坂の“安全保障感覚”は？悪党なりの知恵の所在は？■□■

本作冒頭に見る、徒党を組んでの“押し込み強盗”のような行動も、気の強い女将があらかじめ雇っていた用心棒たちに囲まれると、多勢に無勢？一瞬そう思ったが、剣術の腕前はハッキリしているから、そこでは圧倒的に用心棒軍団よりも井坂強盗団の方が実力は上！そんな中、用心棒の中に1人腕の立つ男を見つけると、井坂は彼との対決を避け、仲間入りを誘い、あっさり同意を取り付けたから、この井坂という男、なかなかの策士！そう感心していたが、その後の押し込み強盗の繰り返しと、根城での酒、女の享楽三昧は“安全保障感覚”の視点からは全くいただけない。これでは、酔っ払って女と裸で寝ているところを襲われたらイチコロでは・・・？

井坂の根城を密かに外から見張っている中、彦次郎は功を焦ったが、策士である梅安は冷静。根城の中でこき使われている口のきけない少年が外に水を汲みに出た時、彼と密かにかつ優しく接する中、“ある策”を授けたらしい。その策とは、桶の水の中にひそかに毒を注入すること。酒に酔いつぶれた井坂たちは、きっと酔い覚ましの水を求めるはずだ、という梅安の読みだが、さて・・・？その後の梅安による井坂への仕掛けの成就と、彦次郎による井坂への復讐ぶりは、あなた自身の目でじっくりと。井坂の安全保障感覚の鈍さにつけ込み、こんな策で仕掛けが成就するのなら、20両の仕掛料で十分だと思ったが、梅安の計算によると、この毒の調達に20万両を要したらしいから、実質報酬はゼロ・・・？

■□■梅安も覚悟を？事前にやるべきことは？決死の反撃は？■□■

梅安と井上との“曰く因縁”をここでネタバラシすることはできないが、井上の腕が超一流であることは、梅安自身がよく知っている。相棒の佐々木も井上に劣らない使い手だから、この2人とまともに対決すれば、鍼医者に過ぎない梅安が太刀打ちできないことは明らかだ。梅安が井坂への仕掛を引き受けたことを井上は知っていたから、井坂の周辺を探っていれば、梅安はそこに必ず現れるはず。井上はそう読んでいたから、梅安と彦次郎が井坂への仕掛を完了させたその場に、井上と佐々木が乗り込んできたのはある意味、必然だ。それを危機一髪で脱することができたのは、菊右衛門が救援の浪人たちを差し向けてくれたおかげだ。井上の腕の怖さを知っている梅安は、その後急いで江戸に帰ったが、梅安は江戸で何をやるの？繁盛していた鍼の診療所を畳み、井上の追及からトンズラするの？さらに、その前に浅草橋場の料亭「井筒」で女中をしながら自分を待っていてくれるおもんと、一夜を供にしてお別れの挨拶をするの？

そう思っていたが、いやいや、そこから見せる梅安の“心意気”は見事なものだから、それもあなた自身の目でしっかりと。ちなみに、ここでも、近時よく目にする高畑淳子扮するおせきが何かと梅安との掛け合い芝居の中に登場するが、これはいらないのでは？あの騒がしい婆さん声を聞いていると、私はいつもイライラ・・・。

■□■“攻め”だけでなく、“待つ”も“守る”も不可欠！■□■

去る4月15日、NHKは「羽生善治 52歳の格闘 ～藤井聡太との七番勝負～」を放映した。今や将棋界は藤井聡太六冠の活躍と、いつ七冠、八冠を達成するかで話題で持ち切りだ。私はNHK杯をはじめとして何度も彼の将棋を見ているが、彼の将棋の読みは常人離れしている上、攻めと守りのバランスが良いのが特徴だ。しかし、仕掛人梅安の仕事は基本的に攻めばかり。つまり、何も知らない相手をこちらから一方的に分析し、どう攻める（仕掛ける）かを決めるわけだ。しかし、本作でははじめて梅安が“守りの仕掛け”を見せるのでそれに注目！

鍼医者として“世のため、人のため”に尽くすことは、亡き悦堂先生との約束である上、自分の天命。梅安にとって仕掛はあくまで裏仕事であり、鍼医者の仕事が表稼業だ。そんな形で“二足のわらじ”を履いている梅安は、江戸に戻った後は、懸命に鍼医者の仕事に従事していたが、それは反面、いつ井上が襲ってくるのかを計算しながらのものだった。そして、“ついし今夜やってくる”との勘が彦次郎と一致したから、梅安の安全保障感覚の鋭さはさすがだ。攻めてくるのは井上と佐々木の2人。対して、家の中で防御するのは梅安と彦次郎の2人だが、彦次郎はあるところにじっと隠れたまま。それを井上と佐々木は知らないはずだ。そんな防御体制は考え得る最善のものだが、あんなに腕の立つ2人からどうやって防御するの？私には当然そんな疑問（不安）が大きくなっていったが、その後スクリーン上では梅安と彦次郎による見事な防御と反撃が！その見事さは本作のラストのハイライトとしてあなた自身の目でしっかりと！ 2023（令和5）年4月17日記